

碩心

社団法人 日本詩吟学院岳風会 認可
 神奈川 碩心会 発行

59年10月現在 会員数
 逗子地区 171名
 葉山地区 298名
 大船地区 63名
 (合計) (532名)

59年10月号 (147号)
 発行 者 萃
 根 岸 岳 集
 編 村 愛 岳
 中 村 愛 岳

生きがい

桜山A支部 西村昌風

詩吟をはじめから十三年…大きな声で堂々と吟じていられる先輩方の中にまじっての練習が、私には楽しく、とてもよい勉強になりました。

教場にもなれ、下手ながら吟じられるようになった頃、すゝめられて詩舞に入る機会を得ました。生まれてはじめて舞うことですし、加えて不器用な私故、扇の使い方など気の速くなるような事ばかりで、教えて下さる先生もそれはそれは大変だったと思います。でも練習を重ねてゆくうち、九月十日”群舞で”山中の月”、荒城月夜の曲”などが舞えるようになり、そして初めて舞台に出た時のこわいような緊張感は昨日の事のように忘れた事はありません。体を弱くしてとてもついて行けそうにないと思っていた私でしたが、体も丈夫になり、練習日は休む事なく今日迄続いてこられました。これも先生をはじめ、皆様のおかげ様と深く感謝しております。

月日の経つのは早いものです。来年は主人の定年の年となってしまいました。何かと大変な事になりそうですが、でも私には

詩吟あり詩舞ありで、それを「生きがい」にがんばりたいと思っております。何とぞよろしくお願いたします。

◎行事予定

◇ 県本部 指導者講座
 十月二十八日(日)
 平塚紅陽中学校

◇ 第18回葉山町文化祭 詩吟詩舞発表会
 十一月三日(日)
 葉山小学校体育館

◇ 第34回逗子市文化祭 詩吟詩舞発表会
 十一月三日(日)
 逗子図書館ホール

◇ 碩心会 大船地区温習会
 十一月十一日(日)
 中小企業労働研修センター
 (戸塚駅そば)

◇ 県本部 高段者 審査課題講座
 (七・八段) 十一月二十三日(日) 平塚農業会館
 (皆伝以上) 一月十三日(日) 平塚農業会館(予定)

◇ 県本部 高段者 審査
 (七段) 二月十七日(日)
 (八段) 三月二十四日(日) 平塚農業会館
 三月三日(日) 平塚農業会館
 (皆伝以上) (予定)

奥伝合格 (十月一日付)

おめでとうございます

- 2203 井上葉風
- 211 岡野和風
- 212 坂田昇風
- 218 千葉美風
- 216 重田敬風
- 217 石月翹風
- 219 田中明風
- 220 齊藤好風
- 221 伊原松風
- 223 阪本周風

◇大船地区温習会に於て許証授与が行なわれます。奥伝以上の方は一人づゝ壇上にて受取ることになっておりますので、なるべく出席して下さい。

秋・秋・秋：



この十月号の月報も、紙面を埋めるのに、鉛筆を手に思案投首で原稿用紙とにらめっこ。そしたら何気なく視線が壁にかゝっている曆にぶつかった。見たら今日は旧曆の九月十日……菅原道真の「秋思の詩」を詠んだ日、そして一年後の九月十日に「九月十日」の詩を詠んだ日でもある。時は秋たけなわ……勉強をかねて秋思の詩「九日後朝同に秋思を賦して制に應ず」を取りあげてみようと思いついた。
 (註)九月号重陽の節句中・清涼殿に待したは重陽の次の日を入れて下さい。

九日後朝

同に秋思を賦して制に應ず

菅原道真

丞相年を度りて幾たびか楽思める
 今宵物に触れて自然に悲し
 声は寒し絡緯風吹くの処
 葉は落つ梧桐雨打つの時
 君は春秋に富ませたまえと臣は漸く老ゆ
 思は涯岸無く報ゆること猶遅し
 知らず此の意何にか安慰せん
 酒を飲み琴を聴き又詩を詠ぜん

この詩は醍醐天皇の昌泰三年(九〇〇)重陽の節句の次の日、即ち九月十日宮中の宴に於て勅題「秋思」を賜り奉答した詩で、其の翌年の九月十日、九州大宰府に流されの身となって、去年の九月十日の事を、断腸の思いで詠んだのが「九月十日」の詩です。

(語 釈)

九日後朝 旧曆九月九日は重陽の節句、後朝はその翌朝という意味で九月十日同に秋思を賦して「秋思」という勅題を賜り

制に應ず 天皇の命によって詩文を作るの意

丞相 大抵のことでは右大臣道真をさす
 年を度りて 二年間のこと
 幾度か楽思す 心から楽しむことが何度か

あつた

絡緯 二こおろぎ

梧桐 二あおぎり

君 第六十代醍醐天皇をさす

春秋に富み 春夏秋冬の略で年のことで、

富みは年が若く前途が長い意

臣 漸く老ゆ 二臣、即ち道真自身は早や年老

いてきた

思は涯岸無く 二思は限り無く深いのに

何にか安慰せん 二何で心を安らげ慰めたら

よいものか

(通 釈)

右大臣となり二年になって、其の間種々楽しみも多かった。だが今宵は物に触れると自然に寂しさがこみあげてくる。こおろぎの声は秋風の吹く所に寒々とひびき、紫宸殿の庭の青桐は、雨に打たれて葉を落す。わが君はまだお若いのに私は早や年老いた。思は限りなく深いのに、お報いする時がなかなかかない。私の悲しみは深いが、この心を何でまぎらわしたらよいだろう。せめて酒を飲み、琴を聞き、又詩でも作って慰めたい。

書いている中に、秋シリーズでゆこうなんて思いつき、表題の秋・秋・秋……なんことになりました。

秋の歌より

さびしさは 寂蓮法師

さびしさは その色としもなかりけり

真木たつやまの 秋のゆうぐれ

ころなき 西行法師

心なき 身にもあはれはしられけり

しぎたつさはの 秋の夕暮

みわたせば 藤原定家

みわたせば 花ももみじもなかりけり

うらのとまやの 秋のゆふぐれ

(以上秋三夕の歌)

月よみの 良 寛

月よみの 光をまちてかへりませ

山路は栗の いがの多きに

深草の里 藤原俊成

夕されば 野辺の秋風身にしみて

鶉鳴くなり 深草の里

田家秋晚という心を 源 経信

夕されば 門田の稲葉おとづれて

葦の丸屋に 秋風の吹く

秋のひるさがり

葉山の文化祭の詩吟詩舞の会場が、今年
は葉山小学校体育館ときまり、はじめての
会場であるため、責任上会場の下見に出か
けた。近づく運動会の練習で、校庭は白一
色の運動着の児童達で大にぎわい、幼き頃
のこゝどもが頭の中を去来する。

絶好の秋日和に、ついでに足をのばして
実教寺を訪ねることにした。小学校から数
分、坂をのぼると腰懸山実教寺に着く。腰
懸山の山号は、昔、日蓮が房州から鎌倉へ
上る途次、こゝの岩に腰をおろして休んだ
ということからその名があるという。

境内の中央に「古将の墓」という立派な
碑が目に入る。史料によると、明治二十六
年御用邸敷地鋤取の際、古墳と思われる巨
大な石棺が発掘され、棺の中の中央に将ら
しき者、その前に婦人と齡十二、三才の小
年、そして左右に従者とみられる大男が二
人づつ、計七人の人骨が並び、人骨と共に
鎌その他武器類も出土したという。人物年
代は不詳であるが、由緒ある人物であろう
と推察され、実教寺に移葬されたという。
昭和八年八月に住職日貞上人により「古将
の墓」と彫られた立派な供養石塔が建てら

れ、武器類の副葬品も保管されているとい
う。

秋のひるさがりの境内は静寂そのもの、
赤い彼岸花が墓をいろどり、しばし往時を
偲びつゝ坂を下りた。

彼岸花 古将の墓をいろどりて(愛岳)

俳句の秋

高梨 誓風

ともに生き 金婚の緑菊薫る

庭石の 配置に生きて路の花

石渡 桂風

新月の 渚に近き海女の家

流れ星 山にひとつの碑眠る

佐久間 爽風

鎌倉は 矢倉数かず露けしや

父と子の 芋キラキラと潮の潮

岩崎 恵岳

草の実の 飛んで明るい水溜り

秋時雨 露地も親しき六区の灯

山口 紫岳

銀杏を ひろふは旅の小休止

しとみ蝶 睦む河原の曼珠沙華

中村 愛岳

旧街道 とんぼ群とび昼静か

夕やみの 山門に浮く曼珠沙華

連吟メモ

○佐久間象山が、ゾウザンかショウウザンかは、先般ショウウザンと読むことで決められたので問題はなくなつた。しかし、次のようなことは一応知っておいてほしい。ゾウザンは、象山の故郷長野県松代にある山の象山（ゾウザン）に由来した雅号であるし、また象山自身の文章にも引用しているところからゾウザンの読みが正しいとされている。が一方、後年の象山自記の文中にS・Sなる署名があることや、ショウウザンと読まれても一向に意に介しなかつたという証言も残っている。この説も一概に退けられない。要は雅号を訓読みするか、音読みとするかの問題である。ちなみに、百科大事典（平凡社）ではショウウザンである。○これと同じような例がある。「荒城の月」の土井晩翠の姓がツチイかドイか定かでないことである。東京堂発行の「世界人名辞典・日本編」はドイとしているが、前東大教授吉田精一博士はツチイの方をとっている。ところで、双方のよりどころを探ってみると、まず、土井家は江戸時代以来の古い商家で、戸籍上はツチイ姓であることに相違ない。しかし、晩翠は昭和六年ごろ、

ある出来事にあつてから晩年の二十年近くは、自分でもドイと読んでいたし、また、詳しくは改姓宣言と題した文を発表している。そして、現在の相続人（次男）は、子供時代からずっとドイで通っているようである。だから、ドイも間違いではないことになる。

○「山中の月」の真山民は、旧教本でも新教本でも（しんさんみん）と振り仮名がしてある。他の漢詩の専門書でも同様であるし、ザンミンと濁らなければならぬ理由も見当たらないので、教本どおりの読みに改めた方がよいと思うのだが。

訃報

石津祥風先生が九月六日・逝去されました。享年73才。詩吟のけいこ中丸おれ、吟友の見守る中急救車で運ばれましたが、帰らぬ人となりました。松井先生の妹さんで茶華道・吟道の指導者として活躍されていました。日頃から身だしなみのよかつた石津先生の姿が目につきます。合掌

森野厚風さん（山ノ根）九月二十六日逝去、享年75才。温容でまじめな人柄の中に、ひょうきんな一面ありで、去りし日ビーチセンターでのステッキを持ってエノケンのモボを歌われた姿が印象的です。合掌

（入会）

- 662 岩柳要三 横須賀市田浦町六一一四
- 663 (諏訪) (電)〇四六八一六一七二三七
- 663 大貫高吉 横須賀市池上五〇七一
- 664 (唐木山) (電)〇四六八一五三三八六九八
- 664 小野勇至 逗子市久木七一五〇六一五
- 665 (逗子A) (電)〇四六八一七七一七八一一
- 665 蒲谷新 逗子市桜山一一二一四
- 666 (諏訪) (電)〇四六八一七三三三九三八
- 666 蒲谷安彦 逗子市池子一七七一〇
- (諏訪) (電)〇四六八一七一三三四九七
- (退会)
- 103 石津祥風宛 (逗子A)
- 126 森野厚風宛 (山ノ根)
- 569 室井こん (唐木山)
- 671 森 章子 (堀内F)

堀内D組では「舟艇守の尺八」につどいて、大野孤山先生の「母の心」を勉強いたしました。この詩は松井岳洋先生の遠縁にあたる方の坊やが逗子の親戚に滞在の折、行方不明となり、その話を伝え聞いた大野孤山先生が、母の心情を詠まれたという事です。その坊やは毎日新聞に尋ね人として出したところ、四・五日後、衣笠の方に保護されていたとか。これも身近な逗子を題材にしたものです。こんないきさつを知って勉強するのも如何でしょう。